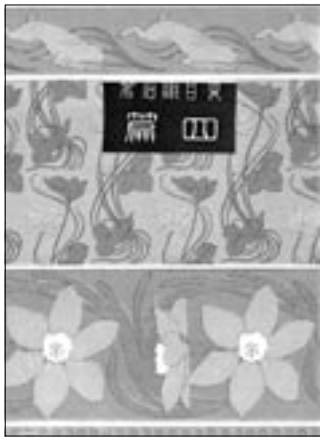


YA

2006
No.18



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。



私の稀観本ノート その18

椎窓 猛

○夏目漱石 四篇

蔵書家にも、名著ツンドク派と古本コットの愛好家、たゞひたすら読書没頭、耽美家と、そのタイプは幾派とも考えられる。しかし、いずれにせよ、根底には“本”が一番好きだという愛読家の精神が流れていないことには話にならぬ。

ところで、明治の文豪夏目漱石については復刻初版本を私は永い間、書棚に立てつづけて手にとることもなかった。たゞ、書棚の品格を外観的に高めるような、装飾の役目をなしてきたように反省するのである。

だが、本はいつの日にか、チャンス到来、精読の機会にめぐりあうや測り知れぬのである。

ここ数年来、私は九州大谷短大生涯学習センター講師として、「文学名作鑑賞」の講座を持っているが、今年は明治から始めようと、森欧外、夏目漱石あたりの名作鑑賞から出発している。それというのも、昨今の中学教科書から欧外、漱石の作品が消え去っているといった話を聞くからである。文化文学の歴史、伝統を如何に考えているものか首をかしげ

NHKプロジェクトX「コシヒカリ」
平成12年10月24日放映
プロジェクトX「コシヒカリ」の誕生を撮り終へぬ夜深みつ
コシヒカリは正に王者に育ちたり光溢らせ鮮麗に熟る
コシヒカリは不死鳥のごと蘇り村人達は泣きて頷く
章らは女教師と泣きて見しといふプロジェクトX「コシヒカリ」誕生を
倒れたるコシヒカリの稗生きあしと映像に重ね章ら綴る
コシヒカリ学級田の美しき米を手に見ら持つ

たところから今一度、森欧外、夏目漱石を読みなおして、新しい発見はないものだろうかと考えてのことである。

そこでとりだしたのが、夏目漱石著四篇「文鳥・夢十夜・永日小品・満韓ところどころ」である。小品のなかの「猫の墓」など微妙興味深いエッセーで面白いのである。

(自分史図書館長)

○歌人の貌

日本一うまい米といえば、誰しも新潟の「コシヒカリ」と答えるであろう。この品種を栽培し、育てた名付親でもある国武正彦氏が八女市(岡山村)出身と知る人はさして多くはないのではなからうか。そして県立八女中学から陸軍航空士官学校へ。戦後、鹿児島農林専門学校を卒業。昭和27年、新潟県の農業試験場へ。

眩しくも榛が影ひく雪原に
試験場の責を負い立つ

稲つくりの歌 国武正彦
ふるさとの八女への想ひこもこもに雪国越に歌詠み綴る
黒木にてやまなみ賞を戴けり初に訪ひてはや五十四年経し
稲架の役目終りて黒炭となりし榛の木赤々と燃ゆ
刈りえざる稗の穂の田の畦に若き農家がオカリナを吹く
村が村でありうることは幻想か踏みこたへなき田の畦を踏み
師が拓く山は夕焼トンネルを出づる列車が汽笛を鳴らす

稲作研究家は昭和二十五年に歌誌『やまなみ』生え抜きの歌人でもあった。「拝啓、近藤雅美選者の御奨めがありましたので、歌集「稲つくりの歌」を贈呈申しあげます。」と館長宛にいていねいなお手紙が添えられての献呈である。

序文に、草野源一郎氏は、「戦時に陸軍予科士官学校を卒業した国武さんと、ずっと先輩だが陸軍士官学校卒の菊池剣先生と、短歌のほかでも気脈通じるものがあつたかも知れぬ」と述べ、菊池先生が短歌への扉を押しひらかれたのではないかと述べられている。いずれにせよ、卓越した稲作研究家が歌詠みであることは、人間として幅の広さを感じずにはいられない。

コシヒカリよくぞ名づくと賞めてくれし 水上勉も雪国育ち

歌人なればこそ、その感性が生きて、稲の名も光ったのではないか。



○やっぱり旅はやめられない
—イスラム編—

おくだかおり

かおりさんはナニワ大阪在住だが世界中旅のひとつ。小学生のころから世界地図を眺めるのが好きだった。

ヨルダンの首都は、アンマン。おいしそうな街だと思った。ところがすぐ横には死海。塩分濃厚で生物が生存できないと判ったが、なぜか教室では中近東のことは教えてくれない。のちに映画『アラビアのロレンス』『ペトラ遺跡』を知って、ヨルダン旅行が始まる。アンマンでは、豪華なイガールを買った。すばらしい民族衣裳である。ヨルダン人になりきって写真にパチリ！



○七夕の里

岩間 静子

「西日本新聞『春秋』の欄で、椎窓館長のことを知りました。昨夏、自分の半生を綴った自分史を出版しました。いじめ、道づれ心中など自殺が絶えない。そこで自分の体験を生かし、生きる勇気が与えられたらと思い出版を決断しました」とていねいなお便りを添えての寄贈。文庫型。

父は少年兵でシベリアに渡り、軍用列車のなかで終戦。無事に帰国はできたが酒乱。

九人家族の次女として育ち新聞配達で家計を支える。家族のあいつぐ悲劇、学校でのいじめに耐え、生きぬいた。あのとき死ななくてよかった——。



○少女昌恵・紅皿エッセイ

川島 昌恵

すっかりセピアになってしまった学校時代の思い出。「少女木村昌恵」は古稀を迎えたおばあさんとまえがき。

昭和17年、アカイ、アカイ、アサヒの読本、60年以上の年月が流れているのに、今も頭中にこびりついている1年生の教科書。

家族と共に、佐賀、長崎と転々。昭和35年結婚、福岡市へ。昭和51年、小郡市に居を定めて、ようやく引越しに終止符。「今はすべて過ぎし日の彼方へ。懐かしい思い出に。転勤族であった父や夫に感謝したい思い」と「少女昌恵」さんは思い出をむすぶ。

「紅皿」投稿入選の数多。賞状ももらった喜びの声。



○昭和17年3月
卒業記念文集

水洗国民学校

校舎の鐘よ いざさらば！
ガリ版、とうしゃ版印刷の手づくり文集。巻頭の言葉を、今、歌誌“やまなみ”の選者近藤雅美さん。

昔の先生の子どもたちへの温かい教育愛がひたひたと伝わってくる文集。それにしても60余年も過ぎた今日まで大切に保存されていたことにも感服させられる。

編集掌記

▼九州高速道、一路南下、久しぶりに鹿児島加治木町の椋鳩十文学館を訪ねた。椋先生が亡くなられたのは昭和六十二年の暮れであった。したがって二十年前に近い歳月が逝ったことになる。私が「椎の実のような童話集」を、葦書房から刊行したとき、ご厚情あふれる序文を書いて頂いている。このことについて、今に深い恩義を感じている。▼文学館を訪ねるのは二度目だが、先生の最後の詩がパネルに大きく掲示されているのに気がついた。それは、「日本の村々に、人たちが、小さい小さい喜びを、おっかけて生きている。ああ、美しい夕方の家々の窓のあかりのようだ」▼椋先生は「母と子の二十分読書運動」の提唱者としても活躍された。鹿児島県立図書館長として、心をみがく読書のあり方をねんごろに説きつづけた先生をしのぶのであった。

館長より

受贈図書紹介 18

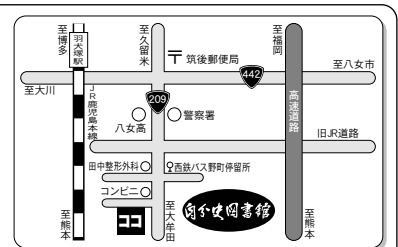
順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。あしからずご了承下さい。

つれづれの記	的場 恒孝	久留米市
句集緑の雨	平木 谷水	大牟田市
悲恋の女王久津媛	福本 英城	日田市
たいしたものではありません	島居 祐示	吉井町
福岡県の文学碑	大石 實	小郡市
／ 近・現代編	大石 實	小郡市
広瀬淡窓日記	井上源吾	長崎市
／ (二)	／	／
／ (三)	／	／
／ (四)	／	／
詩集晩鐘かすかに	秋山 喜文	太宰府市
直腸切断	寺田健一郎	福岡市

蔵書目録ができました
¥160 送料込(郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
開館／午前9時～午後5時30分
休館／日曜、土曜日、祝祭日、年末・年始、その他休館することがあります。予めご確認下さい。
貸し出しはしていません。
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan



〒833-0032 筑後市野町423-8
TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分